

武士道と騎士道の違い

東海地区拳法会 三方原支部 2段 金子聖矢

1. 序論

日本という国が誕生したのは今から 2600 年以上前、神武天皇によって建国された。その後、様々な戦いや混乱、世界大戦などがありつつも日本という国は、その存在と国体が揺らぐことなく、現在まで歴史を途切れさせずにいる。現在、世界で現存する国の中で最も歴史が長い国は、我が国日本であるが、その根底にあるものとは、なんなのだろうか。また、日本にはあって外国にはないものや逆に共通点は何なのだろうか。本論文では、このことについて武士道と騎士道の観点から議論する。

2. 研究

「武士道」と「騎士道」という言葉やその精神は、主に戦士階級における行動規範のようなものであり名誉や忠誠と言った共通価値を重んじる点、戦いにおける考え方や行動指針となった点で非常に似ている。しかし、その背景や重視される美德などについては明確な違いが見られる。まずはこの2つの言葉にどのような違いがあるのか考える。

2.1 武士道

武士道は日本において武士が守るべきとされた道德観であり、主君に対しての忠誠や礼節、名誉、そして死を恐れぬ覚悟が重要視されていた。特に主君に対する忠誠は最重要視されており、主君のためであれば命を捧げることも厭わない覚悟を持つ事と自己犠牲の精神が美德であるとされた。つまり家臣としての責任を全うして場合によっては自らの死を以て主君に仕える覚悟を意味する。武士としての信念ともいえる。

2.1.1 武士道は死ぬことと見つけたり

「武士道といふは、死ぬ事と見附けたり」の一文で始まる山本常朝著の「葉隠」では、武士道の精神について事細かに書かれている。山本常朝が生きた時代(1659~1719年)は徳川家康によって太平が成され、幕藩体制が確立して長く平和が続いた時代であった。太平の世が続く中で武士が戦いに身を置くことが減り武士道の精神が衰えていくことを危惧した山本が「葉隠」を執筆したとされている^[2]。図1および図2に葉隠の本文の一部を示す。

葉隠 聞書第一 一一

武士道といふは、死ぬ事と見附
けたり。二つくの場にて、早
く死ぬ方に片附くばかり也。別
に仔細なし。胸すわつて進む也。
圖に當たらぬは犬死などといふ
ことは、上方風の打上がりたる
武道なるべし。二つくの場
に、圖に当たたるやうにする事は
及ばざる事也。我人、生る方が
好き也。多分好きの方に理が附
くべし。若し圖にはづれて生き
たらば腰ぬけ也。此境危ふき也。

図1 葉隠本文1

圖にはづれて死にたらば、犬死
氣違にて、恥にあらず。是が武
道に丈夫也。毎朝毎夕、改めて
は死に、改めては死に、常住死
身に成て居る時は、武道に自由
を得、一生落度なく、家職を仕
課すべき也。

図2 葉隠本文2

武士にとって戦うということは、勝つか負けるか！つまり生きるか死ぬかの2択しかない！生死をかけた戦いにおいて必ず勝つという保証はどこにもないが死にたくないからと負けておめおめと生き延びれば臆病者とそしられる。負けて死ぬのは恥ではない「武士ならば負ければ必ず死ぬという覚悟を持って戦え」というのが山本常朝の信念であった。

「死ぬ事」そのものが美德であるのではなく戦いにおいて結果的に負けて死ぬことは、武士にとっての本懐であり死すら厭わない覚悟を持って戦う事が重要なのである。図2の「常住死身(常に心身が死と一体になっている状態)」はそのような意味の言葉なのだと考えられる。だからこそ「武士道といふは、死ぬ事と見附けたり(武士道というのは、死ぬ事であると悟った)」が武士にとって非常に重要な意味をもつ言葉なのだろうか。

2.1.2 儒教的価値観

「礼」や「義」といった儒教的価値観は武道において重要視されており行動における品位や道徳的判断が重んじられていた。儒教では「五常(仁・義・礼・智・信)」の徳性を説いているが人を思いやる心や利欲にとらわれずに礼儀を行うことがあり方であるとされている。拳法会では稽古場に出入りする際や稽古のはじめ・おわりに先生や神前に礼をしたり相手と戦った後には、勝ち負けに関わらず相手と礼をしたりする。また、拳法だけに限らず剣道などでも技を決めた時や勝ったときにガッツポーズをすることは、相手に対する礼節を欠く行為であるとされ判定が取り消されることもある。

相手に敬意を払い、利己的な欲望を抑えて礼儀をおこなうことが武道において重要である。

2.2 騎士道

騎士道は、中世ヨーロッパにおいて騎士達が従った価値体系であり主にキリスト教文化に基づく騎士達の倫理体系である。騎士道は、神への信仰・献身、国王への忠誠、弱者や女性の保護という3柱から成り立っている。特にキリスト教の影響は大きく騎士は「神の僕」として正義と信仰のために戦うことを求められていた。また、女性に対する礼節も特徴的であり弱者や女性は大切に守るべき存在として考えられ弱いものにも手を差し伸べる精神である。つまり、騎士は強いだけでなくエリートであれとする精神があるのである^[1]。

騎士はエリートであることが前提であり自分の身を捧げ犠牲となり誰かを守ることはない。また、特定の誰かのために自分の命を散らす精神ではないことが重要である。イギリスが「紳士の国」と呼ばれるのは、この騎士道精神が由来している。

2.2.1 騎士の十戒

フランスの研究者レオン・ゴージェが武勲詩の研究に基づいて編纂した「十戒」では、騎士が守るべき十の戒律が示されている。その戒律とはおおまかにクリスチャンたることや愛国心、弱き者の守護者である事と敵前逃亡の戒め、忠実、寛大、正義などが挙げられている。



図3 レオン・ゴーティエ「騎士道」

レオン・ゴーティエは、戒律の中で「信仰のために国のために死ぬ事こそが騎士の責務である。」としている。

2.3 武士道と騎士道

武士道が「主君」に忠誠を誓い主君のためにその身を犠牲にする死をも恐れぬ覚悟を持つ精神的な文化であるのに対し、騎士道は宗教的信仰と社会的保護を重視する奉仕的な文化であると言える。つまり忠誠の対象が主君であるか宗教の神であるかの違いである。

また、実践的な面においても両者に違いが存在する。武士道は、精神修養や実戦を重視し剣術や弓術そして禅の修行などを通じて心身を鍛える道とされた。それに対し、騎士道には、より儀礼的・形式的な側面もありトーナメント（馬上槍試合）などの競技を通して騎士の力量や品位が示された。これは、現実的で実用主義的な側面が強い武士道と見た目や品位を重視する騎士道の明確な違いであると言える。

3. 結論

武士道と騎士道は、いずれも戦士の道徳規範として中世から発展してきたがその内容や背景は大きく異なっていることが分かる。武士道は、「常住死身」の覚悟で主君に忠誠を誓いいざとなれば、死ぬ覚悟で戦いに臨む精神的文化であるのに対して騎士道は、キリスト教の教えに基づく宗教的信仰であり信仰のために殉ずること女性や弱者などを守護することが美徳であるとする宗教的、奉仕的文化である。日本では古くからこの考えが培われてきたことで内乱などはありつつも日本と言う国が滅ぶことなく現在まで発展を続けてきた。逆に西洋などでは、宗教が原因となる戦争や差別などが多発して様々な国が滅び、そして生まれてきた。両者を比較することで、価値観の違いや重んじてきた文化の違いが読み取れるだろう。

また、こうした道徳観は単なる歴史的遺産にとどまらず現代においても尚、リーダーシップや職業倫理、自己規律といった文脈の中で引用されることが多い。例えば、企業における忠誠心や責任感、他者への敬意といった価値観は、武士道や騎士道の精神に通じる部分があると言える。異なる文化圏で発展した二つの規範は、表現の違いこそあれ、最終的には「人としてどう生きるべきか」という普遍的な問いに対する一つの答えを示しているのではないだろうか。

したがって、武士道と騎士道の比較を通じて単に歴史的な違いを学ぶだけでなく価値観や倫理観の形成における文化の役割、そして現代に活かせる精神的指針についても考えることができると言える。

4. 参考文献

・ <https://hiroofficial.com/2019/09/19/chivalry/>

【マルタ騎士団の精神】武士道とは違う！女性を大切にす騎士道とは？^[1]

・

<https://dcp.co.jp/meikaits/2022/06/30/%E8%91%89%E9%9A%A0%E3%83%BB%E5%B1%B1%E6%9C%AC%E5%B8%B8%E6%9C%9D/>

葉隠・山本常朝^[2]

・ ja.wikipedia.org/wiki

wikipedia